

さや、過去に犯した過ちに対して、Plomer は容赦ない批判をしている。クリケットや犬への執着を皮肉っているのは、同族への愛情の裏返しとも思えるが、アイルランド人の感情を無視した征服のやり方を非難したり (p. 339)、イギリス紳士の偽善的態度を皮肉った夏目漱石の文章を引用して、共感を示しているところは公平だといえるであろう (p. 352)。

最後に、この自叙伝のキーノートといえる文章を紹介しておこう。

「私が偶然にも南アフリカと日本に住んだことは、私にとって特記すべきことだ。南アフリカでは白人の支配という考えが、狂信的な信条にまで高められ、その支配の最終段階の盲目的な無節操な擁護が行なわれていた。日本は、アジアで最初に西欧の機械と工業技術を摂取するのに成功し、最初に近代のヨーロッパの強国を武力で打倒し、そして植民地領土を征服することによって、ヨーロッパは無敵だという、アジアの諸民族にまだ残っていた幻想を最初に決定的に打破した国である。日本の軍国主義者の帝国主義は、他のいかなる国の帝国主義にも劣らず嫌悪すべきものであることが判明したが、私はその帝国主義への傾斜と将来の結果を洞察し、それに対する憎悪をすでに公表していたから、とくに驚かなかった。第二次大戦中の日本人の残虐行為を許そうとは思わないが、そこに至る諸原因を理解しようと努め、その中に、欧米人が日本人に示した侮蔑の念に対する復讐心を認めるのは不当とは言えないであろう。戦争が終るとすぐ、私は日本の友人たちと接触を始めた。日本人が戦争俘虜の虐待と虐殺に責任があるとしても、私もヒロシマの破滅に対してそれに劣らぬ責任を感じた。個人同志を続ぶきづなが断ち切られたならば、あとに何が残るであろうか。よりよき世界、

あるいはよりよき未来への希望のみしかないが、希望よりましなものは握手なのだ」 (pp. 408—9)。

これはまさに二十世紀ヨーロッパの知識人の良心の声である。

Virginia Woolf は晩年の十年間に、「小説よりも自叙伝の方がはるかに面白い。いかなる自叙伝でも小説よりは読み度がある」と Plomer に何度も語ったという (p. 258)。あれほどフィクションに熟中した Woolf の言葉として興味深いのが、この Plomer の自叙伝も、不思議な魅力をたたえた作品だと思う。もと *Double Lives* (1943), *At Home* (1958) の二巻として発表されたものに、後年 Plomer が手を加えて一巻としたものである。

William Plomer: *The Autobiography of William Plomer*, Jonathan Cape, 1975. 455 pp.

Park Honan: *Matthew Arnold, A Life*

山田 泰 司

George W. E. Russell, ed. *Letters of Matthew Arnold, 1848—1888* (1895) の序文によれば、伝記を書いてくれるな、というのがアーノルド (1822—1888) の切なる願いであったという。アーノルドのこのような意思を尊重してか、本格的、標準的なアーノルド伝は、最近まで書かれたことがなかった。

勿論、おびたしい数に上るアーノルドに関する個別研究は、ほとんどみな多かれ少なかれ伝記的要素を含んではいる。とりわけ、「精神の伝記」を試みた Lionel Trilling のアーノルド研究 (1939)、E. K. Chambers の簡潔な伝記的、書誌的研究 (1947)、フランス語で書かれた Louis Bonnerot の詩人としてのアーノルドの心理的伝記 (1947) などには、当然のことながら、かなり伝記的要素が取り入れられているが、これらの研究はいずれも、アーノルドの近親者たちによって相当の検閲削除を受けたといわれる上記ラッセル編の『アーノルド書簡集』に依拠したもので、真に信頼し得るアーノルド像を描き出したとは言えなかった。アーノルド自身の遺志がどうであったにせよ、死後百年近くになろうとする今日、アーノルドの私的、公的生活および著作活動を含むアーノルドの全体像を描く本格的伝記の出現が待望されていた。そのような要望を満たしてくれるのが、ここに紹介するパーク・ホーナン著『マシュー・アーノルド伝』である。

ホーナンがアーノルド伝の決定版を書こうと思いついたのは、1970年であったという。幸い、アーノルドの自筆の手紙は毀損されることなく保存されていた。ホーナンは未公開の手紙、私的日記、公的日記、ノートブックなどにくまなく当たり、アーノルドに関するあらゆる伝記的事実を見つけ出そうと努力して、10年の歳月を経て、このアーノルド伝を書き上げた。ここには現在我々の望み得る最も完全なアーノルド像が提示されているといつてよい。

この伝記は2部に分れていて、1851年、すなわち29歳(28歳で結婚)までを扱った第1部のほうが、カバーする年月は短いにもかかわらず、占める頁数は第2部のそれよりもかなり大きい。この配分は従来比較的軽く扱われてきた(というよりは伝記的資料の入手

閲覧上の支障のために軽く扱わざるを得なかった)若き日のアーノルド——その幼少時代、パブリックスクールおよびオックスフォードでの学生生活、親友 Arthur Clough との交友、Mary Claude なる女性への愛着など——に、ホーナンの伝記作者としての画期的な研究の主力が注がれたことを示唆する。アーノルドの文筆活動からいえば、散文よりも詩に十分な注意が払われているとも言えよう。

アーノルドがどのような幼少時代を送ったかについては、数々のエピソードを交えて詳しく語られているが、明らかなことは、アーノルドがクラフとは違って、ラグビー校の名校長であった父アーノルド博士の息子たるにふさわしい模範生ぶりを一向に発揮しなかったことである。愛情こまやかではあるが心配性の気味のあった母親によれば、14歳頃のアーノルドは、「怠惰で、無頓着で、学校をずる休みし、虚栄心が強く、社交的過ぎ」たようである。このような傾向は、人格者だった父親の無言の圧力をかわすための、かりそめのマスクという消極的な意味に解するよりは、外圧との関連において自己のアイデンティティを模索し確立しようとする自我の積極的な現われであったと解すべきであろう。父アーノルド博士も、このような傾向を示す長男を案じてはいたが、強いて自分の鑄型に息子をはめ込もうとはしないだけの寛容と愛情を備えていたし、息子も自我を貫き通すだけの精神的強さを持っていた。こうして、世間によく見られる、立派な父親対不肖の息子間に生ずる相互反撥、憎しみ合い、というおきまりのボタンをとらずに済み、アーノルドは生涯父親に対して敬慕の念を持ち続けることができたのであった。

親もとを離れて過した3年間のオックスフォードでの学生生活を、アーノルドは思う存分楽しんだらしい。指示された学業に専念する代りに、気ままに読書し、ワイン・ウィス

キー・パーティーに足しげく通い、トランプの賭けで負けて母親に無心の手紙を書いたりしている。また、ダンディーぶりを発揮して、化粧台に、ポーブの『髪盗み』の中のペリンダ嬢よろしく、化粧水、香水のたぐいをずらりと並べて、たまたま訪ねて来た姉のジェーンを嘔然とさせたりもしている。後年アーノルドは、「オックスフォードでの生活は、おそらく、私の生涯で最も自由で楽しい時期であった。私はその地の束縛やしきたりをすべてかなぐり捨てたのだった」と回顧している。

このように大いに羽を伸ばした結果、アーノルドは3年間のギリシア・ラテン語文献学に対する無関心を、指導教官の下での数週間の詰め込み勉強で埋め合わせしなければならぬ羽目に陥った。しかし、時すでに遅く、1844年の優等試験では第2級の学位しか取れなかった。「家族の者に対しても自分自身に対しても何となくすなおになれないという意識と複雑にからんだ、漠然とした喪失感、心地の悪いあこがれ、自分と世界についての当惑」に悩まされたのは、この時期である。

スイス詩篇 ('Switzerland Poems') と一般に呼ばれている一連の詩 ('Meeting', 'Parting', 'A Farewell', 'Isolation. To Marguerite', 'To Marguerite—Continued', 'Absence', 'The Terrace at Berne') に登場する「マーガリート」という女性が誰を指すのか、それは実在の人物であったのか、それとも架空の女性に過ぎないのか、についてはかつて両論の対立があったが、トリリングがアーノルドの詩作法、内的証拠、アーノルドがクラブに宛てた手紙などを手掛りに、実在の人物に間違いなしと断定してからは、ではそれが誰なのかという問題をめぐって議論が絶えなかった。ホーナンは、一章を設けて (第7章 'The Intensity of Love 1848—1849'), これがクラブの妹アン親友であったメアリー・クロード (フランス系で1820年ベルリン生れ)

という女性であることを明らかにしている。ホーナン積年の苦労は酬いられたことになる。我々は、これによって、アーノルドは自らの体験に根ざさないような詩は書かない詩人であった、というトリリングの指摘が正しかったことを改めて悟る。そして、アーノルドが最良の詩を書いた時期は、「やるせない喪失感と安心感がいっしょになっていた時期と合致する」というホーナンの意見にも、なるほどと思わせるところがあることに気付く。

個々の伝記的事実の発掘もさることながら、ホーナンが卓抜な手際を見せているのは、詳細な証拠や裏ある関連事項を提示することによって、すでによく知られているアーノルドの精神的発達のプロセスを明確に照し出すときである。例えば、アーノルドの生涯できわめて重大な年、1850年における 'Empedocles on Etna' の制作、大好きな姉ジェーンの結婚に際しての激しい動揺、Frances Lucy Wightman への求婚、という3つのそれぞれ別個の出来事が、アーノルドの内面において、いかに関連し、それらがどのような自己認識に通じたか、をホーナンは精細な筆致で跡づけている。

第2部では、1851年から1888年までの37年間にわたる、視学官、オックスフォード大学詩学教授、文学・社会・宗教批評、アメリカ講演旅行など、主として公的活動のあとをたどっている。視学官という地位は、ある程度の権威を伴うものであったにせよ、その任務は全イングランドの労働者階級および下層中流階級の4歳から13歳までの子弟のための学校を視察してその結果を報告し、加えて教育実習生の答案を調べることであった。地方の安宿に泊って体調をこわしても、時間までにきちんと学校に出かけて視察を済ませている。幼い生徒にやさしく話しかけたり、頭を撫でてやったりすることも厭わなかった。彼は、このつらい厄介な仕事を、初めから使

命感に燃えて引き受けたわけではない。差し当って、結婚後しばらくの暮らしの見込みを立てるために、ほかによい職が見つからないままに、この仕事に就かざるを得なかったのである。ホーナンは、アーノルドが教育の仕事に次第にのめり込んで行き、死去の2年前まで、実に35年の長期にわたって職務にいかにも忠実であったかを、ヴィクトリア朝中期の教育行政をめぐるかけ引きの有様を時折交えながら、余すところなく語っている。

また、この伝記を通して、当時の社会慣習、精神風土に、随所に、貴重なサイドライトが投げられていることも見逃せない。例えば、当時の兄弟姉妹関係は異常なほど複雑であり、兄弟姉妹は互いに今日では考えられないほどの強いきずなで結ばれていて、それはしばしば肉体的接触によって表現されることがあった、という指摘などは、ヴィクトリア朝の小説に親しむ者には思い当たるふしがあるはずである。

この伝記を読んで最も心を動かされるのは、この「偉大なヴィクトリア朝名士」が生涯を通じて垣間見せる人間的弱さであろう。鉄製の脚矯正器をはめさせられて自意識過剰になり母親の愛情にすがる幼い日のアーノルド、オックスフォード在学中羽を伸ばし過ぎて第1級優等試験に失敗してしまうアーノルド、スイス湖畔のホテルのロビーで青い目の美女メアリー・クロードの現われるのを空しく待っていたアーノルド、2人の息子を若くして病気で失い、自分は子供たちに対して厳し過ぎたのではなかろうかと反省し（決してそうではなかったのだが）、三男リチャードを散散甘やかしてしまうアーノルド。こうした人間味あふれたアーノルドの魅力は捨て難い。

アーノルドの偉大さについては、すでに余りに多くのことが語られてきた。ホーナンの伝記は、アーノルドが「著名なヴィクトリア朝人士のうち最も愛すべき者のひとり」

(Basil Willey 評) であったことを確証している。

Park Honan: *Matthew Arnold, A Life*.
New York: McGraw-Hill; London:
Weidenfeld & Nicolson, 1981. xii+496
pp.